

問題は **一** から **三** までで、一ページから十七ページまであります。確かめなさい。

解答は解答番号 **1** から **24** までにマークしなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

さて、もし society を「社会」ではなく、「世間」に置き換えていたら、およそ翻訳語として、新造語ではなく、母国語の日常語を用いていたならば、という問題を、多数読者の側からではなく、その置き換えをする人々、即ち、翻訳家、翻訳語を多く用いた文の執筆者、広く知識人の問題として考えてみよう。

まず、翻訳という仕事は、非常に難しくなるだろう。そこでは、翻訳語は、翻訳する者の意図によってその意味が決められるのではなく、既に意味を担っているのである。言葉は、私たちの日常生活における、微妙で複雑な、しかも確かな意味を、既に持っている。また、それは、私たちが育ててきた長い歴史における意味をも、既に持っているからである。たとえば、society に「世間」を、truth に「ほんとう」を、raison に「物わかり」を宛てたでしょう。それぞれのお互いの間では、その意味が共通するところもある。が、食い違うところも、もちろんある。翻訳者は、その意味の食い違いに一々抵抗を受ける。訳語じしんが既に持っている意味に、一々妨げられつつ、仕事をしなければならない。それらの日常語を素材として、日常語が今まで使われ、慣れてきたのとは別の言葉使いを作り出し、文を構

成ししなければならない。

それは、或いは翻訳というよりも、私たちの現実^{ある}に密着した言葉を用いて、私たちじしんの現実について考え直すことであるかも知れない。現実^{ある}に密着した言葉を、一応引き離し、それを素材として再構成された別の文を作る、という仕事になるであろう。

問題は、純粹の翻訳の場合ばかりではない。おそらくもっと重要と思われることは、翻訳文よりもっと大量の、翻訳語を多く用いた文の場合である。即ち、学術論文、啓蒙書^{けいもう}、雑誌、新聞にまで至る広範な文である。現代日本語の文章そのものの問題である、とも言える。これらの文章の執筆者もまた、ここで仮定したように、もし翻訳語として、明治以後の新造語ではなく、もっと歴史の長い日常語を用いていたならば、やはり同じような困難に出会うことになるだろう。

私たち日本人にとって、今日、「翻訳」とは、文字通りの翻訳の場合だけの問題ではない。私たちは、翻訳語を使って、日本文を書く。その限りで、翻訳語でものを考えている。中でも、多くの翻訳語を用い、翻訳的な文体に支えられ、特に翻訳抽象語が、その要^{かなめ}を占める文章を書く人々にとつて、そうである。たとえば、社会、真理、理性、主観、良心、近代、封建、弁証法、止揚^{しやう}、実存、主体、状況、体制、構造、疎外、危機、等々、これらはテクニカル・タームとして、縦横に駆使され、多少なりと抽象的な事象について語ろうとするとき不可欠の言葉となっている。それらは、人文科学、社会科学の基本的な概念を語る言葉である。

この事実に対して、もしこのような言葉を使わず、日常語を用いるとすれば、という発言は、無謀とも思えるかも知れない。事実として、この仮

定が果してどこまで可能であるか否かは、しばらく措こう。ここでは、この仮定を、このような事実に対する批評として受けとめて考えたい。

即ち、私たちは、抽象的思考にとつてもっとも基本的な用具である抽象語を、ほとんどすべて、日常語とは別の種類の言葉を宛てて用を足してきたのである。抽象語は、日常の具象語から、その概念が抽象されてできた言葉ではないのである。明治初年以來、私たちは、抽象的思考の概念、つまり、考えるための言葉は、すべて出来合いのまま、完成品として受けとめてきた。基本的な概念であればあるほど、日常語の概念とは縁の遠いところで、既に作られていたのである。

完成品として出発した概念は、まず、その言葉の使用者の思考を、「言葉」のところで停止させてしまう傾向がある。たとえば、ある事柄について、「それは何故か」、「それはいったい何なのか」、と問いかけられた問題は、しばしば、「要するにそれは前近代的なのだ」、「それは疎外現象である」、「体制的である」というような形の答えで、結末がついてしまう。問いかけを契機として動き始めた思考は、「前近代的」、「体制」、「疎外」というような言葉に辿り着いたところで停止し、結論が与えられたことになる。問いかけた者も、答えた者も、このような種類の言葉に辿り着いたとき、それまで不安定にゆれ動いていた思考を、すべて「言葉」にひき渡し、満足する。あとは、「言葉」が引き受けてくれるのである。

「言葉」のこのような現象は、知識人たちの思考の型を作っているように思われる。それは、日本の知識人たちの会話や、些細な文章から、まともな研究論文に至るまで、ほとんど無意識のうちに支配しているのではないか。たとえば、日本の「近代」とは何か、「古代奴隸制」は存在したか、「大

衆社会状況」はどのように現われているか、等々、現実の具体的な事象を、抽象的な概念によって分析するときの、思考の型によく現われている。論者は、それらの概念が、現実の現象にどうあてはまるか、に注意を集中し、或いは争う。思考の型が抽象的である、と言うのではない。思考の働きが、抽象から具象へと向いていて、その逆ではないのである。その結果は、むしろ、具体的な資料は精緻に、詳細に調査され、記述される。が、調査された事実の方は、概念そのものをほとんど動かさないのである。前提となっている概念が、果してどこまで有効であるのか、という意見は稀である。

現実の具体的事象は、抽象的な概念にあてはめられたとき、必ずどこかに裁断し切れぬ剰余が残る。具象的な事実は、抽象語の概念に重ね合わせるとき、必ず過不足を残す筈である。過不足の程度が、もし抽象的な、包括的な考察の要求に比べて小さければ、それは、無視できる誤差として切り捨ててもよい。それは、抽象的な思考を骨組みとしている科学や、哲学の基本的態度である。しかし、問題は、その過不足の程度が、無視できないほどに大きい場合である。実証的な思考方法は、当然そのような場合を予想しなければならぬ。研究者や、考える人は、このようなとき、言葉の概念に合わせて事実の方を切り捨てるのではなく、事実の方に合わせて、言葉の概念の方を修正、ないし変更しなければならない。

抽象語の機能についてのこの態度は、およそ科学の基本的態度である。また、抽象語を扱う者の基本的な態度でもある筈である。そして、私たちにとつては、おそらくもっとも困難な態度である。抽象語の概念は、私たちにとつて、既に完成されているからである。

完成された形で受けとめられた概念は、現実の分析に臨み、その分析能力の限界に行き当たったとき、別な機能の言葉に変わることが往々ある。分析能力の限界で、概念が修正されたり、或いは変更されず、しかもそのまま現実の上に臨ませしめられているとすれば、言葉は、現実に対する規範としての意味に転化することが多い。

たとえば、「社会」とは、現実にある事実を指していた筈であるのに、いつのまにか、「あるべき社会」の意味に転化する。「本来社会とは……」というような言葉使用で語られるときの意味が、その典型である。「本来近代市民社会は……」、「本来都市とは……」、「本来政党とは……」、「本来企業は……」、等々、いわば、概念の本来化である。もちろん、「本来」という言葉は、必ずしも必要ではない。現実の分析の機能として使われた筈の言葉が、やがて、現実を評価する規範として働くようになるのである。重要なことは、このような場合には、論者の思考の中では、ほとんど無意識のうちに、言葉の機能が、

から

へと変化している、という事情である。言葉を操作している筈であった人が、逆に、言葉によって思考を支配されるのである。

思考の用具としての言葉の機能を考えるとき、あらゆる概念は、完全ではなく、また不変でもない。基本的な概念といえどもそうである。科学をひょうぼう標榜する思考方法では、特にそれは重要であろう。このことは、人文科学、社会科学の研究者よりは、自然科学者の方がおそらくよく知っているだろう。自然科学者の用いる概念は、現実には、その有効性をテストされる機会を豊富に持っているからである。即ち、実験や、観察の機会である。中でも、大事なのは、観察よりは実験であり、実験というよりも、むしろ

生産の場における検証である。或いは、生産という意味での実験である。

たとえば、自然科学者の用いる「力」や、「熱」という概念は、必ずしもその細部に至るまで厳密に定義づけられているわけではないし、またその必要もない。重要なのは、その概念を使って構成された理論が、現実には「力」や、「熱」を作り出すことができるか、ということである。理論とは、いわば「自然」の或る部分の縮図である。実験や生産は、この縮図を頼りに、「自然」の再生産を試みるのである。縮図の厳密さは、再生産という仕事にとって、必要かつ十分な限り確かであればよい。概念の定義の確かさは、またそれに基づく理論の確かさは、きふきよく窮極的には、いつでも、再生産という仕事を検証してくれるのである。問題は、精密さ、とか、厳密さ、とか、確実性、と言うよりも、有効性である。科学者は、もちろん、より確実で、より厳密であることを目指している。が、それは常に条件付きの確実さ、厳密さである。窮極的には、いつも、有効であるか否か、どこ迄まで有効であるか、の問題となる。「力」や「熱」について、科学者は、有効である限りまで定義している。そして、その有効性が、再生産の場で疑問とされたとき、科学者は、概念の定義の方を修正するか、或いは、別の概念で置き換えざるを得ないのである。

概念の修正や、小規模な変更は、自然科学では、ごくふつうの出来事のようにある。が、基本的な概念の根本的な変更は、自然科学でも、そうしたたびあることではない。多くの場合、それは、天才の独創的な仕事であった。そのようなとき、自然科学は、飛躍的に進歩したのである。「力」や、「熱」に代わって、やがて「エネルギー」という概念が登場し、その「エネルギー」という概念じしんもやがて変化した。自然科学の歴史は、その

ような基本的概念の変革の歴史に要約される、と言うこともできるであろう。

概念の存在理由が、結局このような意味の「有効性」である、ということは、自然科学の場合に限ったことではないであろう。それは、およそ科学を標榜する他の諸科学でも、その他、およそ言葉の抽象的な概念を機能として用いる思考方法でも、多少の差はあるとしても、共通する原則であると思う。ただし、自然科学以外の場合には、その用いる概念の有効性を検証する機会が、決定的に乏しいのである。自然科学における実験や生産のような手段は、ほとんどない。その概念の「有効性」の検証は、もっぱら自然科学における観察に比すべきような方法に限られているのである。

これに加えて、私たち日本人にとっては、そのような抽象的な概念は、ほとんどすべて、そして基本的であればある程、完成された形で与えられている、という事情がある。既に完成されている概念であるならば、改めて検証する必要はない筈であろう。問題は、その有効性の是非よりも、もっぱら適用であろう。もっぱら現実をそれに従って理解し、或いは現実を裁断するための、便利な、貴重な用具なのである。それを当然のこととして、私たちは「概念」を受けとってきたのである。

たとえば、^オ翻訳語で、「市民」という概念がある。citizen や ciroyen の翻訳語である。明治十五年、^{注1}中江兆民は、^{注2}ルソーの Du Contrat Social の翻訳、『民約譯解』の中で、この ciroyen を、「土」と訳している。これは、今日からみると、いささか不思議である。ciroyen とは、日本語の士農工商でいえば、工商の階級により近い筈である。ところが、原著の ciroyen は、単なる社会的な階級の名称であるだけではない。時代を開くべき主体とし

ての期待をかけられた階級であり、また相応の歴史を担った階級である。それは、明治初期の日本人の感覚で言えば、士農工商の工商というよりは、士に近かった、とも言えたのであろう。

要するに、ciroyen にふさわしいような日本語はなかったのである。

「市民」という言葉が人々に使用されるようになったのは、その以後のことである。それは、市制が施行され、そこに住む人々に対して与えられる名称であった。私たち日本人にとって、「市民」とは、或る地域の住民、という以上の意味は、余りないのである。

ところで、この日本語の「市民」は、やがて citizen や ciroyen の翻訳語という地位を与えられた。問題は、ここから始まるのである。日本語の「市民」にも、たしかに citizen や ciroyen に共通するような意味もある。が、他面、当然、意味は違っているのである。日本語の「市民」の方は、歴史も浅く、概念の内包も乏しく、人々の日常生活の中で生きている言葉の意味も貧弱である。しかし、ひとたびヨーロッパ先進文明語の、citizen や ciroyen の翻訳語として宛てられた「市民」は、この当然の事実を見誤らせる。現にある「市民」と、翻訳語「市民」の原語の概念が混同される。現にある「市民」と、「市民」の原語の意味との違いに否応なく気付かせられたとき、「市民」について論ずる者は、原語の「市民」を、現にある「市民」の理想像として位置づける。原語の「市民」は、規範概念として、現にある「市民」の上に臨む。「本来市民とは、こうこうであるべきなのに……」というような議論の進め方が生まれる。このような規範概念化した「市民」は、現にある「市民」の分析としては、当然不備である。不完全である。まさしく、その機能としての不備・不完全を補うように、概念は、規範にすり変えられて

いる。しかも、多くの場合、論者じしんにとってほとんど無意識のうちに、そうすり変えられているのである。

或いは、逆に、現にある「市民」の方を、原語の「市民」概念を通して眺め、一種の理想化、が行なわれる。「市民の出現」として過大評価するのが、その一例である。或いはまた、露骨な理想化を反省しつつも、現にある「市民」と、原語の「市民」との概念の違いを、現にある「市民」の方の歪み^{ゆが}、として決着をつけようとする。「市民意識の歪み」、「市民生活の歪み」というような言い方で示される発想の根拠には、多くの場合、あるべき「市民」の概念が、無意識のうちに潜んでいると私は思う。

念のために断わっておくが、私はここで今日の「市民運動」や「市民意識」に、悪意を持った批評をしているのではない。私の意図は、改めてくり返すのであるが、思考の用具としての言葉についての反省である。言葉の概念の現実における有効性についての反省である。現実の分析のうちに、規範の意識が無意識のうちに紛れ込むことを警戒してほしい、と願うのである。

それは、おそらく、ここで私がいくら繰り返し強調しても不充分であろう。明治初年以來、私たちは、思考の用具としての概念を、完成された形で受容してきた。概念の有効性というようなことは、かつて問題にされたことがなかった、と言ってもよいであろう。

（柳父章『翻訳語の論理』による）

注1 中江兆民——「1847～1901」明治時代の思想家、政治家。

フランス流の自由民権論を唱えた。『民約譯解』は、ルソーの『社会契約論』を中江兆民が翻訳したもの。

注2 ルソー——ジャン・ジャック・ルソー「1712～1778」フランスの作家、啓蒙思想家。

1 傍線部A「翻訳という仕事が、非常に難しくなるだろう」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 日常語が既に持っている意味を素材としつつも、それとは別の使い方を作り出さなければならないから。

② 翻訳語は、翻訳する者の意図によって、微妙で複雑な意味を決めなければならないから。

③ 翻訳者によって翻訳語が異なるため、それらの意味の共通点と相違点を考慮しなければならないから。

④ 現代日本語には翻訳語を多く用いた文があり、多くの困難に出会うことが予想されるから。

⑤ 現実には密着した日常語から離れ、新たな翻訳語を作り出さなければならないから。

2 傍線部イ「すべて出来合いのまま、完成品として受けとめてきた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の

① ～ ⑤ の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 抽象語の訳語は、日常の具象語の概念が抽象されてできた言葉なので、修正の必要がないということ。

② 抽象語の訳語は、抽象的思考に合わせて新たに作るべきもので、日常語とは別種のものになるということ。

③ 抽象語の訳語は、日常の具象語から作られたものであり、考えるための言葉として使われてきたということ。

④ 抽象語の訳語は、日常語の概念とは縁遠いところで既に作られたものであり、それをそのまま使ってきたということ。

⑤ 抽象語の訳語は、抽象的思考の用具であり、基本的な概念ほど日常語の概念をもとに作られてきたということ。

3 傍線部ウ「言葉」のこのような現象」とはどのような現象を指すか。その説明として最も適切なものを、次の

① ～ ⑤ の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 翻訳抽象語は完成品として優れた機能を持つため、その言葉を使用すれば問いに決着がつくという現象。

② ある事柄について思考する際、翻訳抽象語を用いると結論が与えられたかのように見えるため、それ以上思考しなくなるという現象。

③ 思考は問いかけを契機として動き始めるが、翻訳抽象語に迫り着くと難しさのために停止してしまう現象。

④ 問いかけた者も答えた者も、翻訳抽象語に迫り着くと結論が見えなくなり、不安定になるという現象。

⑤ 会話や研究論文等にまで翻訳抽象語が使われているため、知識人たちの思考が型にはまったものになるという現象。

4 傍線部エ「実証的な思考方法」とあるが、この場合どのような思考方法のことを指すか。その説明として最も適切なものを、次の

① ～ ⑤ の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 抽象的な概念を具象的な事実にあてはめた際に生ずる過不足に対し、事実に合わせて概念を修正するよう思考すること。

② 具象的な事実を抽象的な概念によって分析する際、常に抽象から具象へと固定的に思考すること。

③ 具象的な事実を調査する場合は、精緻に、詳細に記述され資料化されるべきだと考えること。

④ 具象的な事実をもとに、そこからわかることを抽象化して新たな抽象語を作り出そうと考えること。

⑤ 抽象的な概念に具象的な事実を重ね合わせると過不足が生じるが、それは誤差として切り捨ててもよいと考えること。

5 空欄

A

B

のそれぞれに当てはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① A 事実 B 概念
- ② A 現実 B 評価
- ③ A 分析 B 規範
- ④ A 規範 B 現実
- ⑤ A 概念 B 事実

6

傍線部オ「翻訳語で、「市民」という概念がある」とあるが、本文中のcitoyenと「市民」との関係を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① citoyenの訳語にふさわしい日本語がなかったので、全く異なる意味の「市民」が新たに翻訳語となった。
- ② 「市民」は当初は、市制が施行された際に市の住民という意味で用いられていたが、後にcitoyenの翻訳語となった。
- ③ 「土」と「市民」には共通する意味があるため、citoyenの翻訳語が「土」から「市民」へと変化した。
- ④ citoyenと「市民」の意味には相違点があるが、理想の市民像という意味を持つ点において共通している。
- ⑤ 「市民」という語は歴史が浅く概念の内包も乏しいが、citoyenの翻訳語となったことでさらに不完全な概念になった。

7

本文の表現の特徴を説明する文として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 二つの情報を比較して共通点や相違点を明確にしながら、それぞれについて批判を加えている。
- ② 複数の事例を述べ、それらを根拠にして結論や主張を述べるような論理の展開になっている。
- ③ 自らの考えを示した上で、具体例をあげてさらに詳細に考察を加えるような展開になっている。
- ④ 異なる立場の主張をとりあげ、それに反論する形で自らの考えの妥当性を述べている。
- ⑤ 一つの事柄に対し複数の観点を明示し、一つの結論に向かって多角的に考察を展開している。

二

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

私は夏の中頃から、宇土酒造所に客となつて膜翅類注1の採集に耽かつていた。私はろくろく他人と口を利くこともなく、それで誰かが私の無愛想な顔を蜂のようだと嘲あざわらつたが、まったく私は眼玉めだまばかりをぎろぎろさせて口をとがらせ、蜂のように痩せて、あたりの野山を飛びまわっていた。

ある朝私は靄もやの深い時刻に起き出て、せんだつてうちから山向ここの柳村の鎮守社の境内に半鐘型のスズメ蜂の巣を発見しておいたので、その後の状態を観察しようとして面紗ヴェールや皮手袋を用意して、酒倉の脇を抜けようとする、馬に荷を積んでいた一人の若者が、これから山向ここの竜巻村まで赴くのであるが、帰途に空樽あきだるをつけて来るためにゼーロンを空身からみでつれて行くから、途中まで乗って行かないかと言った。

ゼーロンとは私が五六年も前に抽象的に名づけた酒倉の老荷馬ろうにうまであるが、そして私の空想では「ドンキホーテ」注2のロシナンテにも匹敵すべき私の愛馬であつたが、実際では少しも私に慣れていなかった。私はそれに勝手にそんな名前をつけ、永年の間夢に慈しみを寄せつづけていたせい、目のあたりでは一向私に親しみもせず、おまけに臆病馬で、蛇あぶが一匹腹にとまっても激しく全身を震わせて飛びあがったり、牝馬ひんばに出あうと己の廃齡たるも打ち忘れて機関車のように猛り立ったりする態さまに接すると、悲しみともつかぬ憎念もに炎ゆるのであつた。だが永い間の私のゼーロンに寄せる感傷性は、やがて人々の間でさえ認められてややともすると彼等かれらは、その鞍くらを私にすすめるのが習慣だつた。

私は、内心かなりの迷惑を感じて、

「いいえ、いりませんよ、たくさんだよ。」と手を振つたが、若者は、それを、私がすすめられる酒を辞退しているものと勘違いして、馬の方ほうも問題の他にして、

「竜巻の権五郎へ持つて行く新酒なんだから、ともかく、まあ出がけの祝いをつけておくんないな。」と枅ますをつきつけると、朱塗しゅぬりの酒樽を傾けてこんこんと音をたてた。私はまに故郷の近くに戻っているものの生家へは足踏みもせず、こんな草深い田舎で蜂を追いかけているというのには、言うべくもない暗鬱あんうつな情実におさえられているのもあつたが、うっかり酒の酔よなどに駆られるとろくでもない因果觀念の塊が爆発して世にもあさましい青鬼と化す恐れがあつたので、固く酒盃しゅはいを慎んでいたのであるが、祝いの新酒ときくと口にしないわけには行かなかつた。

川面の薄靄さつさつが颯々さつさつと消えて、川向ここの櫟林くろばやしには斑まだらな光が洩もれていた。ゼーロンは光の方へ尾を向けて、後足でしきりと土を蹴ふつていた。

「ふざけるない、土竜もぐらの無精馬め、びんた一つ食らわそうかえ。」

若者はゼーロンを罵ののつて、二三日前に田原の町まで荷をつけて行つたところが、大した重さでもないのにまるで足どりがひよろひよろして危うく酒をこぼされそうだった、希代の横着馬である故に、空樽より他には載せられないなどと述懐した。

重荷をつけて若者に轡くわをとられていたタイキに引き換えて、私のゼーロンは断じて乗手の意に従わなかつた。奴やつは、流れのふちに来ると、勝手に首を長く垂れていつまでも水を飲み、草を食つた。そして、乗手がいか程じれて、腹を蹴ふつても飲み足りるまでは動かなかつた。

それをまた若者は、私がゼーロンを愛するのあまりそのように気ままに

放擲^{ほうてき}しているのだらうと思ひ違えているので、今更私としても不平もあげられず、また私の馭馬^{ぎよば}の手腕が実際にこれほど稚拙^{ちせつ}であろうとは誰も信じなかったから、そんな手前も手つだつて顔つきだけは私も能^{あた}う限り己が愛馬を甘やかせている態度よろしく、悠々と見せかけているものの、胸底^{かんしやく}は疳癪^{かんしやく}の火であるのみであつた。

「庄さん——」と私は、漸^{ようや}くはじめの丘を登つて、下りにかかった時、もう先の田んぼ道に達している若者へ精一杯の声をかけた。われながら聞く己の声が悲鳴のようであつた。「お宮へまわつて蜂の巣を見て行くんだから、君は構わず先へ行つてくれないか。」

私は、その柳村の出端^でれで厄介馬^{やくかい}を若者に渡す内意^{ないい}だったが、この憎い畜生の多くの悪癖^{あくへき}中の悪癖^{あくへき}とも言ふべきは、さほどに鈍重な性質でありながら、乗手の心を食つていてややともすれば鼻の先で嘲^{あざわら}る如き横意^{よこい}地を示すのである。だから私は、若者にすすめられるがままに、このまま乗り通して竜巻村の新酒祝いの家まで行つてしまおうと決心していた。そうするうちに、更に困つたことには私はしきりと尿意を覚えはじめていた。するとあたかもゼーロンは私のその意を察して逆らい出した如くに、

X

様の駆足を次第に急速に運んで、やがて柳村の中宿に達した。

私は、口の悪い柳村のことだから、これ幸いと駆けるゼーロンの鬣^{たてがみ}に頭を埋めて、一気に通り過ぎようと眼をつむっていたが、どうも応援の様子が尋常でないで、そつと薄眼をあけて前方を眺めると、すぐ二三間先を赤毛の裸牝馬に乗つた子供が、うしろ向きになつて、あかんべえをしたり、おいでおいでの手まねをしたりしながら、しきりとゼーロンをからかっているのだ。ゼーロンは夢中で牝馬の尻を追つていた。

私はもう真に夢中となつて、腰にさしていた捕虫網を抜き放つや、柄も折れよとばかりに必死の思いでゼーロンの尻を殴つた。棒切れの音が、馬の肉体にピシリピシリと沼を叩^{たた}くような不気味な響きを発して鳴ることに、打たれる馬は色欲に眼を眩^{くら}まされて阿修羅^{あしゅら}と化しているためにかえつてグロテスクな興奮に猛り立つた。音は翻つて私の頭天から釘^{くぎ}を打ち込むかの如くに、めりめりと食い込んで、そのたびごとに全身で堪えている尿意が蜂の巣のように動揺した。

私の両足の猛獸捕獲器の如きバネ仕掛けと、右腕の鞭^{むち}の力とは水車小屋の構造のように活躍を続けていたが、次第に動力の鈍りが現れ、あわや私の腕や足はバッタのそのように折れて、精根も尽き、今にも昏倒^{こんとう}しかつた。私はもうまぶたさえも動かすことが出来ぬようなフラフラ状態であつた。妙にあたりがしいんとして来ると、ありがたい眠りのようなものにふわふわと体を宙に浮かせられるかのようなのだつた。なんとということなしに私は、「ああ、もう駄目だ！」とつぶやいた。そして私は、たしかにそれまで握つていた捕虫網の棒を、意味もなく空へ向けて投げ棄^すてたまま、激浪^{げきろう}に弄^{もよほ}ばれる小舟に似た馬の首根に観念の眼を閉ぢて、安らかに眠つた。

そこにどれくらいの時が経つたのか気づきもしなかったが、やがて私は、先程の調子とはまったく趣きの違つた、聞くも非常と察せられる体^{てい}のにわかに物々しい、

「ワッ！……」という群集の悲鳴に呼び覺まされた。さつきからのほんなな夢だつたのかしら？ と私は耳を疑いながら首をあげてみると、おお、なんとまあ、それまで七重八重に私達^{わたしたち}を取り巻いて執拗^{しつよう}な哄笑^{こうしょう}を挙げていた村人等が、まことに急天直下の天変に打たれた如くに狼狽^{ろうばい}して転んだ

り跳ねたりしながら頭をかかえて、四方八方へ火の粉のように飛び散っているのだ。

その時、どこからともなく、

「蜂だぞ、蜂だぞ、熊^{注3}蜂だぞ！」と叫んでいる声を私は聞きわけた。その声でふと見直すと、面紗の上に二三匹のスズメ蜂が止まって、しきりと剣をしごいている状態がうかがわれた。考えてみると、あの釣鐘型のスズメ蜂の巣はちょうど今自分が立っている頭上の神楽殿^{かぐらでん}の軒先にさがっていたことに気づいたのでなにげなく仰向いて見ると同時に、私は思はず、

「アッー」と仰天の叫びを挙げて舌をかんだ。――私が、さっき夢中で投げ捨てた網の先が偶然にも、蜂の巣に衝突したに相違ないのだ。釣鐘型の横腹^{げんぷ}に拳骨^{げんこつ}大の風穴があいて無数の蜂が湧き立っていた。

しかし私が驚いたのは、怒れる蜂を恐れたのではなかった。私は前述の如く充分な武装を施しているので彼等の来襲は恐れなかったが、朝な夕な私は蜂と同じように営々とここに通ってこれらの状態を観察することを、近頃の生甲斐^{いきがい}としていたのである。――足柄^{注4}郡曾我村五郎丸字夜見^{よみ}、どこへ出るにも馬の背を借りずには街の灯も見ることが許されぬ人煙まれなる草深いところに、遊蕩^{ゆうどう}的性格の持主である私が酒も飲まずに永い滞在が保たれていたのは、夙^{つと}にこの社のスズメ蜂の巣のお陰であつたのだ。私は早朝と、日中と、そして晩と山を越えて柳村へ来ては、蜂の巣の下に蹲踞^{そんきょ}して、時間による膜翅類の生活状態を観察し、撮影した。

だが、せっかくの蜂の巣は横腹に穴をあけられたばかりでなく根を払われたと見えて、風の無いのに宙にかかったままゆらゆらと動揺して今にも墜落せんばかりの惨状だった。

「これこそなんとしても取り返しをつかぬ失策でありしよ。」^イ

私もゼーロンのような吐息をついて、そんなに思いながら、やる方のない悲しみを飲み込んで行くとちょうどその悲しみの重味に圧^おし潰されて行く空気枕のように、次第にゼーロンの腰は低くなって、あわやその腹部が地面とすれすれに垂下して、私の両足の先もまた地上に達しそうになったので、ともかく私は用を足してしまわなければならぬと負傷者のような痛ましい物腰で鞍から逃れようと試みた。そこで私の片方の足がハネ釣瓶^{つるべ}のように静かに虚空に動きはじめた時、急遽^{きゅうきょ}、斜め頭上のあたりから二三条の茶褐色の光の如き一直線が射したかのように翅音^{はおと}を震わせた蜂達が飛びかかって来たかと思えると同時に、有無なく彼等はゼーロンの流汗で黒光っている巨大な臀部^{でんぶ}に鋭い槍先を突きとおした。

ゼーロンは名状し難い悲痛^{いみなな}の嘶^{いな}きをあげると同時に四ツ足を伸ばすと、地雷火に跳ね飛ばされた凄まじさで、宙に飛びあがった。私の軽い五体は、たしかにその瞬間、ゼーロンの背中から更に二三尺も上の宙に飛びあがって、落ちると私は不幸にも、やはりゼーロンの臀部にべったりと、ももんが(鼯鼠)のように吸いついていた。

ゼーロンは、虹型の弾道を描いて一挙に境内を突き切ると、はなやかな水煙を挙げて流れへ飛び込み、息をつく間もなく水を駆け渡って、一目散に竜巻村の森林へ駆け込んだ。ゼーロンの狂奔状態はいささかの氣勢を落とすけしきもなく、斜めへ、斜めへと森を突き、藪^{やぶ}をくぐり、崖を降って、馬の背のみで小半日もかかると言われている竜巻山の嶮^{けん}をたちまちにして踏み越えて――しまったらしかった。

がやがやという人の声で、私はゼーロンの鬘^{まん}の中で息を吹き返した。権

五郎家の主人をはじめ若主人、妻女、娘、馬方、その他大勢の村人達にとり囲まれて、ゼーロンは水を飲んでゐた。あの狂奔で、漸く痛みも去ったらしく奴は事の外元氣そうに尻尾しっぽを振っていた。どうやら私はその尻尾のはために背中を打たれて目を覚ましたらしくもあつた。

遅ればせに到着したタイキの若者は、この光景に接するやいなや、私の膝を引つ張つて、

「ありがとうありがとう！」と連呼した。「どうしてこの馬をつれて来ようかと持てあましていたところを、お陰でこんなに楽々と着いてしまつて、なんともお礼の申しようありません。」

権五郎の主人が私の前に恭々きんげんしく叩頭こうとうして、何はともあれ祝いの席の上座についてから、村民代表の前で、乗馬心得に關しての訓話を一席披露ひろうしてもらいたいものと申し出た。私は無論辭退する決心だつたが、舌の先がつつてしまつて言葉を發することも出来なかつた。

私の徹底的に嚴かな無言の表情から、主人は何も彼も私が承知したものと合点して、祝宴の先にあたつて、

A

一同の者が酩酊めいていをせぬ間に

せつかくの訓話を謹聴したきもの——と襟を正して、道を開くのであつた。

私は、聴く耳もなく先程から、

B

胡散うさんな眼つきであたりの様子を

物色していたが、

C

門脇のモロコシ畑の一隅に、堀立ほつたての野外やがい厠かわやを

発見すると、

D

お神樂の武将が快諾の見得を示すみたいな笑げにも

物々しい仁王立ちで、

E

胸を叩き、沈重にかぶりを縦に振つた。

——そして、突然両腕で力一杯下腹を抱えると、折れ釘の如く腰を直角に曲げてモロコシ畑へ姿をかくした。

「吾が昆虫採集記」のくだりとしては、その間の出来事は脇道に外れる故

に省略して、夜見の酒倉の二階にペン先を戻そうならば、あたりは既に秋の香りが立ち込めて、私は低いランプの下で蜂の巢の破片を整理していた。蜂の巢の巢にも退屈して、窓掛の間から空を仰ぐと、蠍座さそりの一端からほのかに流れ出ている銀河が北方の空高く竜巻山の上に翼を広げる白鳥座を貫いて、夜更けのアンドロメダを呼んでいた。

私は星を眺めていると、あんなに憎らしいゼーロンではあるが、その理由はともあれ、あの素晴らしい狂奔振りはこの世のものとも思えぬ程の、見れば見るほど異彩を放つて、いつかは天空のペガサス注6を連想せずにはいられないはなやかな畏怖に駆られて来るのであつた。

当のゼーロンは数日前から厩うまやに籠居して、秣草まぐさだけは常にも増して食る癖に、なぜか人間の姿を極端に嫌つて、人の近寄るけはいがすると放屁ほうひをもつて退け、終日終夜入口の方に背を向けたまま「ふて寝」の惰眠に耽ひたつているというもっぱらの噂うわさであつた。酒倉の土竜馬と言えど誰しも、鼻をつまんで顔をしかめぬ者とはなかつた。

たとえこの現世の上では、ふてくされの土竜馬であるとはいえ、ひとたびゼーロンとしての因果なゆかりを持った上は、自分までが土竜馬と蔑んで見返りもしないというのはうしろめたき思いであらう——私は、しまいにそう気づいて、提灯ちようちんに火を入れた。そして街から届いていたコッペ・パンの棒と、一本の蜂ブドウ酒とを携えて納屋裏へ愛馬の厩を訪ねた。

酒倉の軒下を抜けて納屋裏へまわると、星月夜に映えた豆畑が青白く光つて、淵ふちのように静かだつた。二本の横木が渡された土竜馬の厩の入口にも微かな光が縞しまになつて射し込んでいた。横木の間から覗のぞいてみると、なるほど奴は頭部を奥にして太々と寝そべっていた。人間を毛嫌いしてい

るというからにはなかんずく、私であるということに悟られたら激しく冠を曲げて足蹴にでもされるだろう——私は誰よりも奴に対して脛に傷持つ身と覚えているので恐る恐る近づくと、まるで猛獣に餌でも与えるかのような臆病な物腰で、さっと奴の口のあたりにパンの棒を投げ出すと同時に外へ飛びのいた。そして息を殺して様子をうかがった。土竜馬は寝そべったまま餌食を頬張っていたが、別段私に危害を加えそうもないので、私はいかにも物優しく慈愛のこもっているかのようなつくり声で、

「ゼーロン！」と呼んだ。奴の面と向って、この名前を口にしたのは、おそらく最初の決心だった。私はわれながら自分のわざとらしい音声に冷汗を覚えずにはおられなかった。

すると枯草の中から、黒い塊が、やおらと起きあがって、人の声の方に首の方向を向けて来るのであった。私はぞっとして豆畑のふちまで後ずさりして、じっと土竜の顔色をうかがった。——ところが、まったく私にとつては意外のことには奴の両眼は女のように柔和な光に溢れて、物優しくにまたたき、真実親しそくに長い顔を上下にゆすりながら、片方の前足で、もつと、私に側へ寄ってくれと物言うが如くにこつこつと飼馬桶の端を叩くのであった。私はむしろ薄気味悪い心地で、左の肩を先にして横歩きに近づいて行くと、奴はますます猫のように慣れて来て、しまいには私の肩の上に長々と伸ばし出した鼻面を載せかけて私の顔に並べると、あたかも嚙々たる睦言を語らう如く微かな吐息をついた。——私は、もう大丈夫と安心して、もう一度、

「ゼーロン！」と呼んだ。私の胸は奇妙に甘く高鳴った。私は胸の下まで垂れ下って来た奴の鼻面を静かに撫でた。それからブドウ酒の壺を取りあ

げて、彼の口へ向けると、彼はヒヒヒと笑うが如き陰気な声をあげて大きな口腔を天井へ向けてあんぐりと開いた。私は飼馬桶を踏台にして、それに酒を注ぎ、残りを自分の口に傾けた。私が踏台から降りると、彼はまた元の通りに私の肩に鼻面を伸ばして厩の軒からうっとり月を仰いだ。竜巻山の空のあたりには星雲の薄光がゆらめいていた。

勲を立てた名馬と騎手の銅像だ——と私はうなり、じっと空の彼方を望んだ瞳と、ゼーロンの首を抱えた腕に底知れぬ陶醉を覚えながら、武張った姿勢を崩さなかった。扉に掛けた弓張り提灯に、えんまこおろぎが止まってしきりと翅をこすっていた。私の採集は膜翅から直翅に移ったので少なからず食指が動いたが、せっかくの姿勢と未曾有の恍惚状態を崩すのが惜しまれてなおも微動さず浮かべなかった。ゼーロンの吐息と首の重量との触感が私の肩先から頬へかけて、生温かく動いて次第に私は切ない操感を覚えはじめたが、一層全身に力を込めて、壮麗な大空をほのぼのと見守りつづけた。

（牧野信一「夜見の巻」吾が昆虫採集記の一節による）

注1 膜翅類——膜翅目の昆虫の総称。キバチ・ハバチやアリ・ヒメバチ・ミツバチなどが含まれる。

注2 「ドンキホーテ」のロシナンテ——スペインの作家ミゲル・デ・セルバンテスの小説「ドン・キホーテ」で、憧れの騎士になりきった主人公が乗る瘦せた馬の名前。

注3 熊ン蜂——地域によっては「スズメ蜂」を「熊ン蜂」と呼ぶ。

注4 足柄郡曾我村五郎丸字夜見——架空の地名だが、現在の神奈川県足柄上郡大井町近か。

注5 野外厠——屋外に設けられた便所。

注6 ペガサス——ギリシア神話中の翼を持つ神馬で、死後天上に昇って星座となったという。天馬。

注7 嚶々たる——鳥が互いに鳴き合っているような。

注8 直翅——直翅類は直翅目の昆虫の総称。コオロギ・キリギリス・バッタ・ケラなどが含まれる。

注9 攢感——くすぐったさの感覚。

※本文中には、現代では使用されていない表現が用いられているが、原文を尊重し、原文通りの記載とした。

8 傍線部ア「悲しみともつかぬ憎念に炎ゆるのであった」とあるが、「私」がそのような感情に襲われるのはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 女性にだらしな「私」のように、ゼーロンも年甲斐もなく牝馬に猛り立つような恥ずかしい馬だったから。

② 「私」の空想においては、ゼーロンが「ドンキホーテ」のロシナンテにも匹敵するほどの愛馬であったから。

③ 酒倉の老荷馬であるにも関わらず、ゼーロンが虻が一匹腹に止まっても驚き恐れるような臆病馬だったから。

④ ゼーロンが「私」の勝手な夢想をよそに、まったく親しまないばかりか情けない様子しか見せなかったから。

⑤ 酒造所の世話になりながら五六年も前から見知っているのに、ゼーロンが少しも「私」に慣れなかったから。

9 空欄 X に当てはまる言葉として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 落馬

② 木馬

③ 尻馬

④ 犬馬

⑤ 竹馬

10

傍線部イ「これこそなんとしても取り返しのかぬ失策でありしよ。」とあるが、ここで「取り返しのかぬ失策」とはどのようなことを指しているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 村人たちが急な蜂の来襲に狼狽し、転んだり跳ねたりしながら頭をかかえて、四方八方へ火の粉のように飛び散っていたこと。
- ② 「私」の面紗の上に二三匹のスズメ蜂が止まり、怒ってしきりと剣をしがいているらしい、恐ろしい状態のこと。
- ③ 遊び人の「私」が近頃の生甲斐として観察してきた蜂の巣を、夢中で投げ捨てた網の先で壊してしまったこと。
- ④ 柳村が、どこへ出るにも馬の背を借りずには街灯も見えないような、人里離れた草深い場所であったこと。
- ⑤ ゼーロンの腰が低くなったので、「私」が用を足すために鞍から降りようとしたちょうどその時、蜂に刺されてしまったこと。

11

空欄 A のそれぞれに当てはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | |
|---|---------|---------|---------|
| ① | A 思わず | B はったと | C まだ |
| | D なんとなく | E ふと | |
| ② | A ふと | B 思わず | C はったと |
| | D まだ | E なんとなく | |
| ③ | A なんとなく | B ふと | C 思わず |
| | D はったと | E まだ | |
| ④ | A まだ | B なんとなく | C ふと |
| | D 思わず | E はったと | |
| ⑤ | A はったと | B まだ | C なんとなく |
| | D ふと | E 思わず | |

12

傍線部ウ「はなやかな畏怖」は、どのような感情を表しているか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 狂ったような様子への強い恐怖感
- ② 明るく美しいイメージによる親密感
- ③ はつきり感じられた堅苦しい謹み
- ④ 異常さに対する抑えきれない憎悪
- ⑤ 卓越した力と姿への恐れと尊敬

13

傍線部Ⅰ「枯草の中から、黒い塊が、やおらと起きあがって、人の声の方に首の方向を向けて来る」とあるが、それはどのような状況を表現しているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 「私」の思い切った呼びかけに応じるかのように、枯れ草の上でパンを頬張って黒い塊のように見えていた馬が、ゆっくりと起き上がってこちらに首を向けてきた、ということ。
- ② 黒い塊に見えるほど頭部を奥にして太々と枯れ草に寝そべっていたのに、名前を呼ばれたために急に起き上がった馬が、人声の方に首を向けてきた、ということ。

- ③ ずっと厩にひきこもりながらも、餌だけはいつも以上によく食べていただけに、大きな黒い塊は、枯れ草の中から瞬時に元気よく起き上がって首を向けてきた、ということ。

- ④ 得体の知れない黒い塊が、「私」に呼びかけられたためにとてども不機嫌になり、枯れ草の中から足蹴にでもしそうな勢いで起き上がって首を向けてきた、ということ。

- ⑤ 人の近寄る気配がするだけで放屁して人を遠ざけるような馬なので、黒く見えていた馬が呼び声にいきなり反応し、枯れ草から激しく起き上がって首を向けてきた、ということ。

14

傍線部オ「勲を立てた名馬と騎手の銅像だ——と私はうなり、じっと空の彼方を望んだ瞳と、ゼーロンの首を抱えた腕に底知れぬ陶醉を覚えながら、武張った姿勢を崩さなかった。」とあるが、この「私」の気持ちの

説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 「私」がロシナンテにちなんでゼーロンなどと名付けたりして、周囲から認められるほど長い間愛し慈しんできた結果、星空が美しい今夜、ついに奥底から心が通い合えて、深い信頼関係がこの先永く続くことをはつきり予感している。

- ② 実は蜂に刺された痛みで疾走したに過ぎないゼーロンと、実は乗馬も馬との意思疎通もろくにできない「私」が、なぜか偶然並び立つて、まるで優れた馬と騎手のように一緒に星空を眺めているという、まれな感動のひとつきを体全体で味わっている。

- ③ 夜見から共に駆けてきた庄さんや竜巻村の人々に絶賛されるほどの、隠れた名馬ゼーロンと、周囲から認められるほど長く深く調教を続けてきた、隠れた名騎手の「私」という二つの真実が、あたかも星月夜の銅像になったようだと感動している。

- ④ たとえなげやりで反抗的な「土竜馬」だとはいえ、何かの縁で「ゼーロン」と名付けるほどの関わりを持ったからには、このまま馬を見捨てるのはうしろめたいことだと気付いて反省し、パンとブドウ酒をくれてやって良かったと心から安心してしている。

- ⑤ 実際には少しも慣れ親しまず、臆病で牝馬好きの横着馬でありながら、人の心を読んで嘲り逆らうようなゼーロンに対して、今も「私」の胸底では疳癰や憎悪が尽きないために、ちょうど騎兵の銅像のように、身も心も固い緊張感に包まれている。

三

次のA～Cのそれぞれの設問に答えなさい。

A 次の⑮～⑰の各文の傍線部のカタカナを漢字に改めたとき、それと同じ漢字を傍線部のカタカナに含むものを、後の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

⑮ 監査役を関係者以外の者にイシヨクした。

- ① 伐採とシヨクリンを同時に進めるべきだ。
- ② 一方的にキヤクシヨクされた話は無効だ。
- ③ 物価高騰はシヨクヒにまで影響が及んだ。
- ④ 昔からカキのヨウシヨクが盛んな海域だ。
- ⑤ 定年後はシヨクタクとして勤務を続けた。

⑯ 新製品をジュンタクな資金で開発した。

- ① 戦場に駆けつけてキヨウジュンの意を表す。
- ② 高温多雨のためシツジュンな気候と言える。
- ③ 衣服はヒヨウジュンの大きさ以外なかった。
- ④ 完成は今月チュウジュンにずれ込むだろう。
- ⑤ 税引き後のジュンエキはいくらもなかった。

⑰ この計画は成功の見込みがカイムだ。

- ① 専門外の話題はカイモク理解できなかった。
- ② ある虫が伝染病をバイカイするとわかった。
- ③ 事情によってカイゴウに参加できなかった。
- ④ 業務の改善には抜本的なカイカクが必要だ。
- ⑤ 古いビルを一気にハカイする方法は危険だ。

B 次の⑱～㉒の各文の意味をもつ表現として正しいものを、後の

- ①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

⑱ 広く書物を読み、物事をよく知っていること。

- ① 博覧驚記
- ② 博覧鏡記
- ③ 博覧脅記
- ④ 博覧狂記
- ⑤ 博覧強記

⑲ 恥知らずで厚かましいこと。

- ① 鉄面皮
- ② 好事家
- ③ 居丈高
- ④ 不如意
- ⑤ 偉丈夫

20 相手に冷淡でそつけない態度をとること。

- ① 鼻にかける
- ② 鼻でわらう
- ③ 目から鼻へ抜ける
- ④ 鼻持ちならない
- ⑤ 木で鼻をくくる

21 周囲の状況ばかり気にしてなかなか決断できないこと。

- ① 紆余曲折(うよきよくせつ)
- ② 五里霧中(ごりむちゅう)
- ③ 右顧左眄(うこさべん)
- ④ 自縄自縛(じじょうじばく)
- ⑤ 東奔西走(とうほんせいそう)

22 すらすらとよどみなく話すさま。

- ① 暖簾に腕押し(のれんにうでおし)
- ② 流れに棹さす(ながれにさおさす)
- ③ 口八丁手八丁(くちはっちょうてはっちょう)
- ④ 立板に水(たていたにみず)
- ⑤ 横板に雨垂れ(よこいたにあまだれ)

C 次の「A群」に挙げた①～⑤の作家を生年順に並べ替えたとき、三

番目となる作家を一人選び、その番号をマークしなさい。さらに、その作家の発表した作品を、後の「B群」の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

23 「A群」

- ① 大江健三郎
- ② 島崎藤村
- ③ 川端康成
- ④ 武者小路実篤
- ⑤ 二葉亭四迷

24 「B群」

- ① 「雪国」
- ② 「浮雲」
- ③ 「友情」
- ④ 「破戒」
- ⑤ 「飼育」

(以上で問題は終わりです。解答票の解答番号 25 以降は使用しません。)